

大学のワークショップで実施した相互ウォッチワードの意義(1):質問紙の分析から

○谷和剛¹・坂本和久¹・押江隆²

(¹山口大学大学院教育学研究科・²山口大学教育学部)

目的

相互ウォッチワード(串崎, 2011)とは, ペアになった2人がそれぞれ思いついた単語をカードに書いた後, 2人が書いた単語から連想される単語を書き, それらの単語に, 「現在の自分の状況を表すキーワード」などの意味を持たせて, そのことについてペアで会話をして自己理解を深めていくワークである。

杉村(1998)は, アイデンティティ形成は, 自己の視点に気づき, 他者の視点を内在化すると同時に, そこで生じる両者の視点の食い違いを相互調整によって解決するプロセスであるととらえ直している。相互ウォッチワードでは, 似たようなプロセスを辿ると考えられる。また, 相互ウォッチワードは遊びの要素の大きいので, 楽しく実施して気分が良くなることも考えられる。

そこで本研究では, 相互ウォッチワードを実施した意義を, 気分とアイデンティティの質問紙を用いて検討することを目的とする。

方法

参加者は, 男性1名, 女性7名(年齢範囲19-48歳)の計8名であった。

相互ウォッチワードを実施する前後で, 谷(2001)の多次元自我同一性尺度(MEIS: 20項目・7件法)と田中(2008)の簡易気分調査票日本語版(9項目・7件法)に回答を求めた。相互ウォッチワードを実施したペアはお互いに初対面であった。

結果

簡易気分調査票の合計得点について, 相互ウォッチワード実施後の得点が, 実施前の得点に差分を加えた得点を平均とする正規分布に従うと仮定して, 差分と標準偏差についてMCMC法によるベイズ推定を行った。また, 差分を標準偏差で除した効果量 d を生成量として算出した。差分の事前分布は区間 $[-150, 150]$ の一様分布, 標準偏差の事前分布は位置母数0, 尺度母数5の半コーシー分布に従うと仮定した。差分推定値の平均は7.02[1.70, 12.51], 標準偏差推定値の平均は7.24[4.34, 12.55], 生成量 d の平均は1.04[0.19, 1.93]であった。

さらに, 多次元自我同一性尺度(MEIS)の合計得点

についても同様に分析した。差分推定値の平均は6.10[0.58, 11.80], 標準偏差推定値の平均は7.24[3.84, 14.74], 生成量 d の平均は0.94[0.07, 1.88]であった。分析にはR3.4.3とrstan2.17.3を使用した。長さ2000のチェーンを4つ発生させ, ウォームアップ期間を1000とした。全てのパラメータのRhatは1.01以下であり, 有効サンプルサイズは総サンプルサイズの10%以上であった。

また, 参加者ごとの簡易気分調査票の合計得点の変化をFigure1に示した。

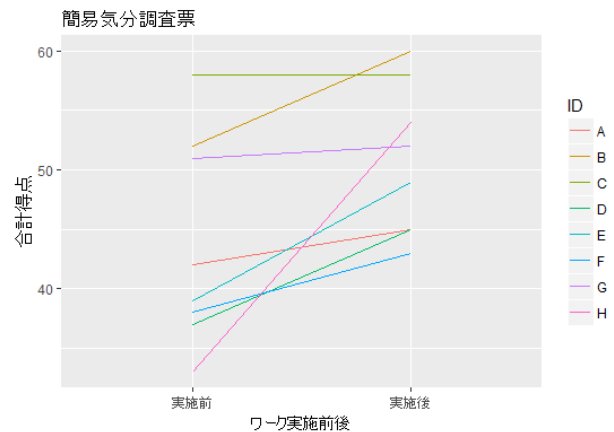


Figure1.簡易気分調査票の合計得点の変化

考察

相互ウォッチワードの実施前より実施後の方が簡易気分調査票の合計得点が平均7点程度増加することが示された。また, 自我同一性尺度の合計得点は平均6.1点程度増加することが示された。相互ウォッチワードを実施することでわずかながら自我同一性の感覚が高まったと考えられる。

高石(2009)は2000年を過ぎたころから, 学生相談室に来談する学生の新たな典型像について, 「時間をかけ, 主体的に悩めない」という点が共通しており, 自分の内面の情動を「言葉にする」力が十分育っていないと指摘している。今回, 初対面の人が相手でも相互ウォッチワードで自分のことについて話をして気分が良くなることが示唆されたので, 自己開示の難しいクライアントが学生相談に来談したときに, 相互ウォッチワードを利用することでクライアントに無理なく自己開示のきっかけを与えることができると考えられる。